東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

天津日本人学校における音楽指導と実践

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-05-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 水野,真由子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174052

天津日本人学校における音楽指導と実践

前天津日本人学校　教諭
岩手県盛岡市立渋民中学校　教諭　水　野　真由子

キーワード：音楽科の学習内容、指導の工夫、外部への発信、交流活動、行事等

１．はじめに

現行の学習指導要領では、児童生徒に知・徳・体のバランスのとれた人材を育てることを目指している。そのため、創意工夫を活かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させることが必要である。また、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力などの力を育て、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めることが求められている。

そこで、天津日本人学校では、校内研究テーマを「伝え合い、学び合う子どもの育成」とし、学校をあげて表現力に焦点を当て授業実践に取り組んできた。

本研究は、在外教育機関、特に中国の日本人学校の特色を生かした教材選択や指導法、学校行事や国際理解教育との関わりについて考えるものである。

２．天津日本人学校での実践（平成 25~26 年度の取り組みより）

(1) 教材について

現行の学習指導要領にも盛り込まれているように、わが国の伝統的な楽器や音楽を教材として扱うことは、重要項目の１つである。日本の場合、中国から伝えられ、その後独自の発展を遂げた楽器や旋律等が多い。つまり、日本の伝統音楽を扱う際には、中国とのつながりを同時に学んでいくことが有効であり、中国で生活している本校の児童にとっては、より高い関心を期待することができる。

また、天津日本人学校では、表現力に焦点を当てて、研究を推進してきた。そこで、ただ歴史を学んだり、有名な楽曲を鑑賞するだけではなく、実際に演奏したり、分析したりするような、児童が主体となれる活動を組み込むことが必要である。この時、「伝統」や「歴史」を始めから意識することがないよう、児童の好きなゲームや暗号解読等を取り入れ、楽しみながら自然に学習内容に興味をもつような流れも意識すると良い。

さらに、教材としては、児童にとって親しみがあり、技能が不足していても比較的簡単に演奏できる短い旋律のものが不可欠である。

ここでは、小学部第３学年での授業実践を紹介する。「メロディ暗号を解き明かせ！」とした本題材は、学習指導要領の「A 表現」の歌唱の指導事項イ「歌詞の内容、曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと」及び、器楽の指導事項イ「曲想にふさわしい表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること」、「B 鑑賞」の指導事項イ「音楽を形作っている要素のかかわり合いを感じ取り、楽曲の構造に気をつけて聴くこと」及び、ウ「楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏の良さに気付くこと」をもとに設定している。また、共通事項の中から、「速度」「リズム」「音階」に着目して指導している。

まず、様々なリズムや音階、速度の特徴を感じ取りながら、その構造について知覚し、それらの働きによって生み出される特質や雰囲気を感受する。次に、自分たちなりのイメージをもって、それらを生かした旋律をつくる。そして、その作品に合った発声や表現を工夫して歌い、お互いに聴き合ったり、感じたことを伝え合ったりすることをねらいとした。

(2) 実際の授業について

この授業では、まず児童に基本の旋律を与え、次に、「速度」「リズム」「音階」のそれぞれの諸要素に着目して変化を加えたものを提示する。1単位時間ごとに1つの要素に着目して旋律を工夫してつくっていくことで、本題材で着目する諸要素に的を絞るだけでなく、それぞれの要素の働きも明確にしていくことができると考えた。この活動によって、目に見えないために抽象的にしか捉えられないことの多い音楽の雰囲気が、何によって生み出されるのかを理解し、表現に繋げていくことができた。

教材は、3年生で扱うソプラノリコーダーの練習曲の1つを教科書の中から選び、題名や出典等は明かさず、「基本の暗号」として旋律のみを与えた。この曲は本学級の児童に最も馴染みのある4分の4拍子で旋律も単純であり、調号もない短い曲であるため、ほとんどの児童がリコーダーで演奏したり、階名唱することができる。また、原曲との違いも、多くの児童が容易に感じ取ることができた。

授業の進め方としては、本単元で扱う音階と関わりのある国または地域の地図（宝の地図）を集めていくことで、表現や鑑賞の意欲を高めさせていく。まず、原曲の旋律（基本の暗号）をある程度覚えた後、「速度」（第1次）と「リズム」（第2次）を変化させたものを提示し、そのイメージを頼りに暗号を解いてゆく。さらに、「音階」を変化させたものを提示し（第3次）、最後の暗号を解く。暗号は、1単位時間に扱う音楽の諸要素と曲想の変化について言葉で説明できれば解くことができたものとみなし、その都度、宝の地図を1部ずつ手に入れることができる。また、第3次で取り上げる音階は全て5音音階とし、調号もなく比較的平易なものの中から、箏曲の調弦法「平調子（ド、ミ、ファ、ラ、シ)」、「琉球音階（ド、ミ、ファ、ソ、シ)」、中国の音階で日本にも伝わった「呂音階（ド、レ、ミ、ソ、ラ)」の3つを比較する。

この際、例として用いた曲は、「さくらさくら」「島唄」「茉莉花（まつり花)」である。どの曲も聴いたことのある児童が多く、特に「茉莉花」は、現地小学校との交流会で「歓迎の歌」として慣れ親しんだ曲である。母国である日本、現在生活している中国、そして、中国との交流により栄えた歴史をもつ琉球（沖縄）の伝統音楽を実際に演奏したり比較することにより、それぞれの歴史的なつながりを感じ取ることができた。

また、表現力を伸ばす活動として、全ての時間において、原曲との雰囲気の違いが何によって生み出されるのかを言葉で説明したり、身体表現を用いて友達に伝える活動を取り入れた。この活動によって、音楽の曲想や雰囲気と諸要素とのかかわりを明確に理解させ、自分なりの考えや思いをもって表現しようとする意欲へとつなげていくことができた。

３．学校行事・特別活動とのかかわり（平成25~26年度の取り組みより）

(1) 学校行事とのかかわりについて

多くの日本人学校の特徴の1つに、小中学生が同じ学校の中で生活していることや、下級生に比べ、上級生の人数が少ない傾向があることが挙げられる。特に本校の場合は小規模校ということもあり、中学部の生徒数は、各学年10人にも満たないことが多い。また、現地の学校や国際学校との交流会、中国文化の体験学習等の、日本人学校ならではの行事が多いため、逆に、「学習発表会」や「文化祭」のような学芸的行事は行っていない。そのため、日本の小中学校ではよく見られる、生徒主導の合唱練習等の音楽活動の経験がほとんどない児童生徒が多かった。

そこで、平成25年度に行われた「開校15周年を祝う会」へ向けた取り組みの1つとして、中学生を中心とした生徒主導の合唱活動に取り組んだ。前述のとおり人数の少ない中学生に、練習の進行や注意すべきポイント、音とりの仕方や拍子の取り方等を指導し、自信を持って下級生に教えることのできるリーダーに育てることには想像以上の難しさがあった。しかし、生徒の素直さと中学部の先生方の協力のおかげで、少しずつではあるが自主的な活動として定着してきたのではないかと感じている。上級生の姿を見た下級生も、それぞれの学級で同じように練習できるようになり、卒業式等の練習にも生かすことができるようになってきている。

(2) クラブ活動とのかかわり

本校では、小学部 4 年生以上を対象に、週に 3 回を基本としてクラブ活動を行っている。その中で唯一の文化部である「文化クラブ」は、平成25年度から音楽を楽しむクラブとして、合唱や合奏、中国の伝統楽器の演奏等に取り組んできた。

平成25年度は、中国の伝統楽器「葫芦丝（フールース）」に挑戦し、中国や日本の伝統音楽、人気アニメのテーマ曲等、様々な曲を演奏できるようになるほど、一人ひとりの上達が目に見えて感じられた。前述のとおり例年行われている現地小学校との交流会では、歓迎の歌「茉莉花」に合わせた対旋律の演奏を披露することができ、この経験をきっかけに、自分達で楽しむだけではなく外部へ発信したり、多くの人たちを楽しませることへの意欲が高まってきたと考えられる。この後には、簡単な曲紹介も交えた全校朝会での合奏発表も行い、少しずつではあるが、発表の仕方や演出といった分野にも手を広げることができるようになってきた。

平成26年度には、合唱や合奏を中心とした活動を行った。そして、日頃の練習の成果を発表するとともに、他の児童生徒にも音楽を楽しんでもらおうという目標を掲げ、初めてのコンサートを企画した。演奏の練習はもちろん、選曲、曲順、司会、振り付けや会場の飾り付け、ポスターや招待券等の宣伝方法からそれらの作成まで、ほぼ全てを上級生を中心とした部員が話し合いを重ねながら行った。始めは恥ずかしさから消極的な態度を見せていた児童も見られたが、昼休みに自主練習をすることによって、本番には自信を持って発表することができた。

また、他の児童生徒や先生方の協力もあり、自由参加にもかかわらず、教室に入り切れないほど満員のお客さんに温かい拍手をもらうことができたことも、部員にとっての達成感につながったのではないかと感じている。

(3) 全校を巻き込んだ活動へ

小中学校における音楽科の指導において、授業時数が減少するにつれますます重要な活動の 1 つが、外部との交流活動である。自分達の演奏を発信するだけでなく、同世代を中心とした他の演奏を直接聴くことで、よりよい音楽を求める意欲や、演奏を聴き分ける耳や感受性を育てることにもつながると考える。さらに、より多くの人々と音楽のよさをわかちあうこともできる。そのため、日本の多くの学校では、外部団体主催のコンクールや演奏会等への参加を積極的に行っている。

しかし、在外教育機関である日本人学校の場合、日本国内のコンクール等への参加は不可能であるため、前述のクラブ活動のように、校内、あるいはごく一部の限られた学校との交流の場で短い時間を取ることしかできないのが現状である。

そこで企画したのが、NHKで募集していた動画投稿に応募することである。もともと、平成25年度の全国学校音楽コンクール課題曲の「ふるさと」に取り組んでいたが、この時は募集時期と取り組み時期がずれてしまい参加することができなかった。しかし、それよりも前から募集していた、東日本大震災復興ソング「花は咲く」のミュージックビデオへの参加希望を募ったところ、予想よりも多くの児童生徒が参加を希望した。そして、前年度から少しずつ行ってきた、上級生や文化クラブの部員を中心とした生徒主導の練習の末に、撮影した動画を投稿することができた。

日本人の学校でありながら、日本とのつながりを感じたり、学校関係者以外の外部に向けた発信をすることが難しい現状にあって、この活動は、海外で暮らす日本人としての自信や、日本とのつながりを感じることのできる喜びにもつながったのではないかと考えている。様々な行事や活動が同時進行する中での練習には困難も多かったが、児童生徒の頑張りと、保護者や先生方の協力のおかげで実現できたと感謝している。今後も、このような機会をとらえ、広く児童生徒の表現の場を求めていくことが大切であると考える。

4．おわりに

本研究では、実際の授業や学校行事、特別活動等を取り上げて、中国の日本人学校における音楽科指導について考察してきた。

どの実践においても、学習指導要領を基本とすることにおいては、日本国内と変わりない。ただし、日本の隣国として、歴史的にも深い関わりをもつ中国の日本人学校という特色を生かし、中国の文化や歴史、日本とのかかわり等について肌で感じ、興味をもって自分なりに考えようとする児童生徒を育てることが大切である。そのために、より魅力的な教材開発や授業実践の工夫を行っていく必要があると考える。

〈参考文献〉

・『小学校学習指導要領』 文部科学省　2008年
・『中学校学習指導要領』 文部科学省　2008年
・『小学校学指導要領解説　音楽科編』 文部科学省　2008年
・『中学校学習指導要領解説　音楽科編』 文部科学省　2008年
・『天津日本人学校研究紀要』 天津日本人学校　2012年・2013年